

白山ふるさと文学賞

第五回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年作文の部 最優秀賞

# おばあちゃんの生き方

湊小学校五年

細川 ほそかわ

拓真 たくま

友情や生き方というテーマだったので、ぼくは、おじいちゃんとおばあちゃんの生き方について書きたいと思いました。それは、去年の八月に、おじいちゃんとおばあちゃんが死んでしまったからです。おじいちゃんは、春に心ぞうの手じゅつをして元気になりました。おばあちゃんは、六月にすいぞうがんが見つかりました。がんが見つかった後も、病気だとわからないぐらい元気でした。でも、おばあちゃんは、長く生きられないとわかったので、仕事があるお父さんは石川に残って、お母さんとぼくと妹の三人は夏休みから岐阜のおじいちゃんとおばあちゃんの家でくらし、おばあちゃんのかん病をすることに決めました。

ぼくは、おじいちゃん、おばあちゃんといっしょに住むことは、うれしかったけど、転校するのがいやだったし、おばあちゃんが死んでしまふと思つたら、とても悲しくなりました。おばあちゃんが死んでしまつたら、おじいちゃんが一人ぼっちになってしまうのも心配でした。

おばあちゃんは、早起きして畑に行き、野菜やお米を育てていました。ぼくも、田植えや稲かりを手伝っていました。

去年の五月の田植えは、おじいちゃんもおばあちゃんも病気に気づいていなかったので、とっても元気で、機械で植えつけられないところを、いっしょに植えました。ぼくは、少し曲がってしまったけど、おばあちゃん、まっすぐきれいに植えていました。田んぼの中は、歩きにくいのにじょうずに植えていて、すごいなあと思いました。

田植えが終わって六月の初めに、がんが分かって、おじいちゃんの時みたいに、手じゅつもできないし、治らないと知って、田植えの時、あんなに元気だったのが信じられなくて、なみだが止まりませんでした。

「こうがんざい」という治りようで治るがんもあるけど、おばあちゃん「すいぞうがん」は、病気が進んでいたので治すことができませんでした。おばあちゃんは、

「治らないのに、つらいこうがんざい治りようはしない。」

と言つて、できるだけいたみを少なくする治りようを選びました。おば

あちゃんは死ぬと分かって、ぼくに、

「拓真と結衣ちゃんが大人になるまで見ていたかった。」

と、泣きながらだきしめて言っていました。ぼくも、もつといっしょにいたいと思いました。ビールが好きなおじいちゃんとは大きくなって、いっしょにビールを飲みたかったし、旅行が好きなお二人とは、もつといろんなところに行つてみたかったです。

七月に入つて、おばあちゃんはねていることが多くなり、七月は、暑いのでおばあちゃんは、自分から病院に行くと言ひ、七月二十日に入院しました。ぼく達が引越しをする前に入院してしまつたので、いっしょにくらすことができませんでした。だけど、病院に、ほぼ毎日、おみまに行つていました。入院しているのに、ぼくと妹の背中を、かいてくれました。そのお礼に、おばあちゃんがいたと言つていたおなかをなでてあげました。つめたい足もなでてあたためてあげました。八月に入つて一日だけ、おばあちゃんが家にもどつてくるのが出来ました。おばあちゃんは、ごはんが食べられなくなつていたので、いっしょにごはんを食べることは、できなかつたけど、その夜は、いっしょにねました。

おばあちゃんは、いつものように、背中をかいてくれました。でも手や足は、細くなつていました。病院にもどつてからは、自分で歩くことは少なくなり、ほとんど車イスでした。その車イスをぼくが押して、病院の外に出て、お盆の花火大会をいっしょに見ました。ぼくが生まれてから、毎年この花火大会をおじいちゃん、おばあちゃんを見てきました。

これがいっしょに見られるのが最後だとぼくが思つたように、おばあちゃんも最後だと思つて見ていたと思います。

花火大会が終わつてから、だんだんとしやべるのが少なくなり、ねることがさらに多くなつていきました。そして八月二十九日に、死んでしまいました。おばあちゃんが願つていたように、いたいと言うことなく苦しむことなく、ねむるように死んでいきました。ぼくは人が死んでいくのを初めて見ました。ねているようで、気づきませんでした。おじい

ちゃんは、その一週間前にたおれて、とつぜん死んでしまいました。  
もうすぐ一年たつけど、おじいちゃんのおいしそうにビールを飲むす  
がたや、おばあちゃんのふざけて泣くすがたを思い出します。ぼくは、  
大人になっても、おじいちゃんとおばあちゃんのことをわすれません。  
最後にすごした夏のことわすれません。

